

第1回ピースツーリズム推進懇談会 会議要旨

1 開催日時

平成29年6月16日(金)10:00~12:05

2 開催場所

広島市役所本庁舎14階 第5会議室(広島市中区国泰寺町一丁目6番34号)

3 出席者

懇談会構成員

団体名・役職	氏名
広島県原爆被害者団体協議会 事務局長	前田 耕一郎
広島市立大学広島平和研究所 副所長	水本 和実
特定非営利活動法人 ANT-Hiroshima 理事長	渡部 朋子
特定非営利活動法人ひろしまジン大学 代表理事	平尾 順平
被爆体験証言者(平和記念資料館元館長、元国際平和担当理事)	原田 浩
一般社団法人日本旅行業協会中四国事務局 事務局長	辻 孝和
ひろしま通訳・ガイド協会 会長	古谷 章子
広島市市民局国際平和推進部 部長	津村 浩
広島市経済観光局観光政策部 部長	阪谷 幸春

(計9名、欠席なし)

事務局

経済観光局長(冒頭のみ)、観光プロモーション担当課長、課長補佐、主査、
株式会社JTB中国四国営業企画課長、地域交流推進課ディレクター(計6名)

4 議題

- (1) 座長選任
- (2) 事業概要説明
- (3) 意見交換

5 公開・非公開の別

公開

6 傍聴人の人数

2名

7 会議資料名

資料1:ピースツーリズム推進懇談会開催要綱

資料2:ピースツーリズム推進懇談会(事業概要説明資料)

資料3:ピースツーリズム推進懇談会の公開に関する取扱要領

8 発言の要旨

◆座長選任

(平尾委員)被爆の体験を持ち、現在も修学旅行生など多くの国内外の方々に被爆体験の証言を
されておられ、また、これまで平和記念資料館長や国際平和担当理事も務めておられた原田さ
さんを座長としてぜひ推薦させていただきたい。

《一同、拍手により承認》

(原田委員 (以下原田座長)) 十分な進め方ができるかどうかいささか心配ではあるが、皆様のご協力をいただき、本事業の目的である成果をまとめていきたい。

私はこの会が開かれるという話を聞いた時大変驚いた。ご承知のとおり現在たくさん内外からの来訪者を迎えている。行政は、こういった時期であるからこそ広島への取組についてより多くの来訪者に伝えるとともに、より深い理解を求めたいとの気持ちでこの会を発足されたということであり、感慨深く受け止めている。

大変な使命を負うことになるが、忌憚のない委員の方々のご意見をいただきながら集約していきたい。長い期間の議論になるが、ご協力をお願いしたい。

(事務局) 要綱第 4 条第 3 項に「座長に事故があるとき又は座長が欠けたときは、あらかじめ座長が指名する構成員がその職務を代理する」とある。原田座長から、代理となる方の指名をお願いしたい。

(原田座長) 長年にわたって国際貢献、国際協力事業を推進してこられた渡部さんをお願いしたい。ボランティアの方々とともに広島を発信する大きな力を持っておられ、幅広い分野の経験に立って、NPO 法人代表として、かつては市の教育委員としての役目を果たして来られている。ぜひ、ご協力いただきたい。皆様のご承認をお願いしたい。

(渡部委員) 承った。

◆事業概要説明

《事務局から資料に基づき説明》

(水本委員) 欧米豪の外国人旅行者を中心にとあるが、確かに全国との比較では欧米系の外国人旅行者が多いものの、アジアからも 35% の来訪があるので、アジアも含めて均等というコンセプトの方がよいのではないかと。

(事務局) データを見ると欧米豪の方が平和に関心があって来られているということが言えると思うが、平和記念資料館のデータを見るとアジアの方も、最近クルーズ客船の来航もあり増えている傾向にあるので、あわせてご検討いただきたい。

(辻委員) 欧米豪、アジアに限らず、市内に来ていただいている旅行者ということで考えると、修学旅行生も色々市内を歩いている。国内外からお客様を受け入れることが大事であり、同じことをするのであれば日本語も必要だと思うので、その点も広く考えていただきたい。

(事務局) 世界の多くの方が広島へ来訪して、被爆の実相を知り、平和への思いを共有していただく必要があることから、外国人観光客を主眼にはおいているが、日本人観光客や市民の視点も考慮しながら検討していきたい。ぜひその観点からもご意見をいただきたい。

(渡部委員) 基本的に提示されたものに納得しているが、大事だと思っている点の一つある。平和記念資料館が耐震工事のために非常に狭くなっており、資料展示が限られたものになっている。その中でこれだけの方がいらっしゃっているのであり、ここ数年平和記念資料館が完全にリニューアルオープンされるまでの間、ある配慮を持って、ピースツーリズムについても考えていく必要がある。それも含んでぜひ考えていければと思っている。

(事務局) 国際平和推進部長も本懇談会の構成員であり、一緒になって考えていきたい。

(原田座長) オバマ前大統領が来られたが非常に残念であったのは、平和記念資料館東館が閉館していたことだ。被爆 70 周年という大きな節目の年に閉館しなければいけなかったのか。

このことが現在も尾を引いている。非常に混雑して大変なことになっている。何か別の方策もあったのではないかという気がしている。今与えられた条件の中で精一杯どこまで解消していくかということが、きわめて大きな課題だと思う。まもなく8月6日を迎えるが、昨年、一昨年と大変混雑したことは皆さんよくご存知のことだ。

(古谷委員) 原田座長に全く同感である。被爆70年の年にあのような状態だったのは本当に残念だった。世界からボーイスカウト(約23,000人)が来られたが、大混雑で酸欠で倒れられるのではと心配した。10年、20年先という長いスパンで広島のこと考えている人はいないのかと、平和文化センターの評議員をしているが、激しく怒った。来年7月にはきちんと本館がリニューアルオープンすると聞いているので、その言葉はぜひ実現してほしいと思っている。

(前田委員) 水本委員の欧米豪の旅行者を対象とするので良いのかとのご指摘について、事務局としてこのように書いている以上それに意味があったのではないかと思うので、事務局としてはこれに絞って議論してほしいということであれば提示されたらよいと思う。私個人はアジアも含めるべきという意見だが、欧米豪に絞ることに意図があるのであれば説明していただき、それがよいと思えばそのようにしたい。

(事務局) 特段の意図があったわけではない。データを見てみると、欧米豪の方々が平和に関心があるのではないかと考え、そのように資料に記載した。ただ、クルーズ客船等によりアジアからの訪問も増え、平和記念公園への訪問も増えており、外国人旅行者皆さんが関心を持っていると言えると思うので、幅広くご意見をいただきたい。

(平尾委員) ピースツーリズムを進めるにあたってのデータ分析では欧米豪からの割合が多いという傾向が出ているが、広島市として、今後アジアからの割合を増やしていくのか、この割合を良しとしているのか、何か変えていくのか、方向性や目標があれば教えてほしい。

(事務局) 目指すところは世界の多くの方々の広島への訪問を促し、被爆の実相を知り、平和への思いを共有していただくということである。関心を持っていただいている層としてまずは外国人旅行者を対象としてはどうかと思っているが、先ほど辻委員からもあったように、修学旅行生などの日本人旅行者の意向もあるので、皆様方の知見を教えてください、考えて行きたい。

(渡部委員) 一つどうしても知りたいデータがリピーター率である。広島にどのくらいの方々がリピーターとしてまた訪ねているか。対象は国内外である。また、トリップアドバイザーのランキングで3位に入っているが、口コミは大事だと思う。来ていただいた皆様がぜひあなたも広島に行ってみなさいと言っているかどうか、そのデータがあれば知りたい。

(事務局) 毎年、平和記念資料館で外国人来訪者にアンケート調査をしているが、これによると、広島に来た回数が初めてという人が93%、2回以上が7%で、リピーターはあまり来られていない。今後、懇談会の中で必要な調査についてのご発言があれば、調査をしていきたい。

(原田座長) 色々貴重なご意見をいただいた。今後の会の運営につながる大きなポイントとなるご意見もいただいたので、事務局もそれをしっかり受け止めて次につなげるようにしていただきたい。

(阪谷委員) 先ほどから活発なご意見をいただいているが、ぜひ、思っておられることをどんどんご発言いただきたい。先ほどの座長および古谷委員からのご指摘は、平和推進の問題だけでなく、広島市職員としてどう考えるか、市全体の問題である。ご提示いただくのはとてもありがたい。職員に対してきちんとフィードバックしたい。渡部委員からあったデータについては、

どのような対象について行ったアンケートで、どのような数値だったかも含めて、次回お示ししたい。

(原田座長) ピースツーリズム推進事業という大変な事業を起こすということは、事務局としても勇気のいることだったと思う。ピースツーリズムの原点はあくまでも「平和」であり、「平和」を原点とするということは「被爆体験」が原点にならなければならない。「被爆体験」を原点として、こんな悲惨な体験を二度と起こしてはいけないということを国内外の多くの方に伝えるということである。今実施している平和事業がこれでよいのか、これをどのように発展させれば多くの方々にメッセージを伝えることになるのか、さらには市民はそういう方々をどのような心構えで迎えたらいいか、できれば次回以降に時間をとって皆さんのご意見をいただきたい。ピースツーリズム推進事業は市民の皆さんとともに歩いていくというのが非常に大切なことだと思っているので、機会をとらえてご議論いただきたい。

◆意見交換

①外国人旅行者を対象に「平和」をテーマとしたルート設定等に取り組むことへの思い

(前田委員) ルート設定に取り組むことへの思いは2つある。1つは、広島市域に限定するのか、場合によっては幅広に考えてもよいのではないかと。事務局にお答えいただきたい。もう1点は、外国人旅行者はこういうつもりで来ているという感想である。私は、平和記念資料館長を座長の2代後に務めており、その時感じたことは、外国から来る人は「広島」を見るためにやって来ているということだ。日本のツアー客は限られた時間の中でササッと巡るので、平和記念資料館の滞在時間は30～40分からせいぜい1時間。ところが、外国から来た人はかなり時間をかけてじっくりご覧になる。平和記念資料館を見た後は平和記念公園に留まったり、最近だと国立広島原爆死没者追悼平和祈念館を訪れたりして、じっくり時間を使う。広島に来る外国人観光客は、原爆のことを知ろうと思って来ていることに間違いはない。ピースツーリズムということで何を考えるかということ、広島にはたくさんの原爆に関連したところ、平和に関連したところがあるということがポイントではないかと思う。平和記念公園の中にも原爆の痕跡をとどめているものもあるというようにたくさんの観光資源があつて、どれにも平和・原爆に関連したことがきっとある。だから通底する原爆とか平和ということですべての施設をひろって、観光ということであればこういうものが並べられる、体験型のものであればこういうものがあると示すとよいのではないかと。

(事務局) 市域に限定するのではなく、周辺市町にも平和関連施設があると思うので、そういった場所もご意見をいただければルート設定を考えていきたい。

(水本委員) 外国人を対象とする時、原爆の破壊をまず示すことは定石だと思うが、破壊で何が失われたのかということに観点を持ってくると、当然被爆前の様子の話があり、江戸時代に遡って、江戸時代に文化が栄え、それから明治時代になって明治以降の新たな文化と戦争の歴史、軍都から平和都市へアイデンティティが変わっていったことと、時間軸でどんなエピソードがあるか整理して洗い出し、広く集めることが大事だと思う。もう一つ、外国人には色々な考え方の人がいて、米国人の中には原爆によって米兵が救われたと思っている人もいる。しかし、広島県庁の裏の中国憲兵隊跡地にある被爆死した米軍人の追悼パネルを見ると、敵味方関係なく被害があったことが分かる。アジアであれば韓国人慰霊碑、東南アジアであれば万代橋の下

流に、「南方特別留学生」として広島で学んだ東南アジア学生のための興南寮で被爆した人たちのための碑がある。外国人も巻き込まれたエピソードも視野に入れたほうがよい。中国については、その前の日清戦争に軍都広島がどう関わったのかも関心の対象である。まずはどういう素材があるか掘り起こすことが大事である。

(渡部委員) 本当に広島を知っていただくためには、平和記念資料館、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館、平和記念公園だけでなく、ご自身の足でこの街を歩いて巡っていただきたい。この街には、土地の力があるような気がしている。広島は全域が破壊され人々が亡くなっており、その上に復興している。足元にかつての街があり人々がいる。その人達の思いを、歩くことによって五感を通して感じていただきたい。それから、せつかく来られた人に市民と触れ合っていただきたい。それによって忘れられない感動と思い出を持って帰れば、また広島に帰って来ようと思ったり、周りにぜひ広島に行ってみなさいと勧めてもらえるのではないか。市民と触れ合う機会を持つこと、市民一人一人が自分の言葉で広島を語れる環境をつくることが大事ではないか。

(平尾委員) 私たちひろしまジン大学として、昨年までは広島市観光政策部と一緒に、広島駅に来られる外国人をお迎えしてコンシェルジュのような形で案内するボランティアを毎週末、1回あたり 20 人くらいで活動しており、今も続けているのだが、そこで市民と触れ合っていくことの大切さを感じた。市民にとっても色んな発見や学びがあり、そういう観点は大事である。そこで外国人からよく言われることの一つで、今回のピースツーリズムにもつながると思うのだが、平和記念資料館に行ったが平和記念資料館だけでなく街全体が資料館のようだという話があった。点として平和記念資料館や被爆建物を見るだけでなく、街全体で面としてどう受け入れていくかということが大事だと思う。

もう一つ、多くの外国人や修学旅行生などが来たときに、広島人は良く分かっていないというようでは一番情けない。ツーリズムを作っていくときに、いかに市民がそこに関与できる余地を残せるか。市民自らが案内役になるとか、自分たちでツアールートを設定できる余地を残せるとよいと思う。一部の関心層がする特別な活動としての平和ではなく、いかに多くの人が日常の隣におけるような平和であるかということが、街としてはすごく大切だと思う。ピースツーリズムにおいても、特定の人達が勝手にやっているというのではなく、広島に住んでいる人達も何らかの形で関与でき続ける余地を残せるとよいと思う。

(古谷委員) 4月に2週間、5月に2週間クルーズ船に同乗し日本各地を回る仕事をした。最初のクルーズは4月28日から5月12日、アメリカの名門大学の同窓会やスミソニアン博物館友の会などかなりインテリジェンスの高い御一行で、旅の最後にどこが印象に残ったかと聞くと、広島と答えた。広島に拠点を置くガイドへの社交辞令だけでは無かったと思う。特にアメリカ人に対して語りたかったこと、オバマ前大統領が核を人類で初めて使った国として核廃絶に責任があると思うと話したプラハ宣言を聞いて広島市民がどれだけ喜んだかということ、政治状況はそれを許さなかったが、オバマ前大統領は5月27日に広島に来たこと、その時に自分の手で折られた折鶴を子供たちに渡されたこと、それを一緒に見に行こうということなどを、本当に一生懸命心をこめて語ったからかなと思う。また、現在の世界状況、北朝鮮情勢や、トランプ大統領の発言、中国の行動などを心配しているという背景もあるかもしれない。ぜひ、広島にもう一度来たいと言われた。そこで、今回案内したルートだけでなく、もう一つ深く広

島を伝えるにはどういうことができるかと考えていた時に、今回の懇談会のお話をいただいたので巡り合わせを感じた。また、ちょうど平和記念公園を案内していたときに、愛媛の小学生が原爆の子の像に折鶴をおさめるセレモニーをしており、歌や子供達の代表による平和宣言の内容を通訳したところ、本当に素晴らしかったと言っていた。平和記念公園でただ碑文を見て、平和記念資料館やドームを見るだけでなく、そこにいる人との触れ合い、心を動かされる体験が、この懇談会で生み出されるとよいなと感じている。

(辻委員) 中国運輸局や合同庁舎の付近に(中区上八丁堀)の方へ行くと、あの辺りは外国人旅行者がよく歩いている。平和記念資料館を見た後に、広島城や縮景園に行かれると思うのだが、よくわかるようにルート設定をしてあげるのはよいことだと思う。その時、饒津神社の被爆水鉢など、半径2kmを越えたところにも被爆建造物がある。「Remaining Edo era」の平和的な時もあったというのもお見せした方がよいと考えている。被爆建造物などは平和記念資料館が中心になるが、広島市内を広く歩いてもらいたい。被爆の歴史もあるが、その前の歴史もあるという形でうまく道路上もしくは別の形でご案内できるものがあればよい。

もう一点は、私達がここで外国人の観光について話す時、実際に来ていただいている外国人の観点を時々忘れて話してしまうことが多い。実際に来ている外国人がどのように考えているのか、外国人が泊まる宿泊施設がどうなっているか、他の関連施設の方達がどう考えているのかのヒアリングが必要だと思う。全員に聞くことはできないが、調査により色んな意見を吸収した後に、ここを見ていただきたいというルート設定をしてマッピングする。また、広島県も観光客の滞在日数を増やそうという取組をしている。京都からJRで来て、2~3時間原爆ドームと宮島を見てから帰るというのではなく、見て歩いて滞在し、地元の人と話してもらえるようなマッピングが必要。

(原田座長) オバマ大統領が広島に来られたのは非常に大きなことで、本人にとっても大変な英断だったと思う。しかし、残念なのは、オバマ大統領が来られたことに満足してしまうのではなく、次につなげる施策を展開しないといけないのに、充分に見えて来ない。考えていかないといけない。プラハから始まって広島で終わってしまった、大統領は退任したということではいけない。次の前向きな施策の展開が必要である。また、被爆体験を伝えるのは大切なことであるが、それに加えて、文化、歴史、文学などの分野の被爆後の動きについても含めたコースができないか。例えば栗原貞子さんの「生ましめんかな」という詩があるが、全く生かされていない。栗原貞子さんや峠三吉さんの詩など、そういったところを巡るということもあってもよいのではないか。アメリカの捕虜の問題や中国の問題などの提案もあったが、そういうのも含めもう少し幅広く考える必要があるのではないか。

(阪谷委員) 先日ある方と話していると、平和をテーマとした施設などを巡って当時の写真や遺品などを見ると、自分なりに当時のことが思い起こされて、非常につらくてエネルギーが消費され、ぐったりと疲れてしまうというお話があった。私の体験も重ねてみると、まさにそのとおりだと思う。ルート設定に当たって、当時のことが思い起こされるような施設を選んで、回っていただく方に平和についてじっくり考えてもらうこととあわせて、広島を訪れたことで平和な世の中を自分たちで築いていこうという新しいエネルギーが沸いてくるような場所、未来の自分のエネルギーにつながるような場所も、ぜひ皆様に選んでいただきたい。

(事務局) 一度来られた方が長く広島を中心とした場所で平和を感じていただけるように、単純

に施設をめぐるだけでなく、過去から現在までの広島への思い、取り組んできたことも含めて感じていただきたい。そして、感じていただくためには、市民の機運醸成も合わせてできたらと思う。初めての方には長く滞在していただき、一度来られた方には2回も3回も来ていただいて広島への思いを感じていただくということができればと思う。皆様のご意見も踏まえ進めていきたい。

(古谷委員) コースを設定することは良いアイデアだと思うが、私がよく案内する高齢者の方々には自分の足で歩いてもらうのは難しいと思う。市内循環バス「めいぷる一ふ」を使用して色々なところを巡ってほしい。縮景園の中には被爆直後の写真や、爆風で斜めになったイチョウの木がある。世界平和記念聖堂は戦後の色々な方の努力、ドイツ人の神父のご尽力があって村野藤吾さんの設計ですばらしいものができている。袋町小学校も案内したことがあり、とても印象深いと言われた。道に線を引くルートは、若い方、自転車に乗れる方にはよいと思うが、全員が全員参加していただけるかという点も難しいと思う。

平和だから広島は素晴らしいと思ってもらえることも大事だと思う。広島の3つの美術館、広島市現代美術館、ひろしま美術館、広島県立美術館は、それぞれ個性が違うので、魅力的なものとして提示するというのはどうか。いずれも「めいぷる一ふ」に乗って行くことができる。過去の人々の苦労の上に、今広島市民が平和を享受し、芸術を楽しんでいるというのを見ていただくことも大事ではないか。

(渡部委員) 何人かの方に、平和記念資料館などをご案内した後、水が見たい、海が見たいと言われた。本当に真剣に見た方は、心が重くなってくる。そういう方には、次に賑やかなところに行くのではなく、川のそばで、あるいは海のそば、緑の中で、自分の思いを解き放ち、座って静かに考えるということも必要ではないかと思う。海が見たいという方には、宇品の港に行く。島影も見え、瀬戸内海は特別な場所だと思う。緑も大事である。木陰に座るだけでも木からエネルギーをもらうことができる。そういう配慮がルートの中にも、全体を考えたときにも必要だと思う。

(辻委員) ルートを巡ってその場所に行ったときに、その場に誰か伝える人がいないといけない。ルート設定も必要であるが、AR等によって説明するよりも、できれば、平和記念資料館の中や平和記念公園内でボランティアガイドが活動しているように、誰かが説明することができないか。単にそこに行くだけでは少し意味が薄れてくる。ずっと人がいるようにするのは課題があるだろうが、例えば「めいぷる一ふ」の特定の時間の便を「ぴーすめいぷる一ふ」として、この時間であればガイドが乗っていて説明ができるなどのような形で、思いを広げられるようなことができないか。

(原田座長) 人による対応は大事だと思う。また、その場所で何を伝えることが必要か。説明板など、背景も含めて説明が書かれたものがあり、そこに行けばある程度理解ができるようにするためにも数を増やしていかないといけない。「めいぷる一ふ」は、最初は乗客は少なかったが、今は乗り切れないうくらい多くの外国人が乗っており、あのような小さいバスでよいのかとも思う。しかし、残念ながら現代美術館の入館者が伸びていない。かつては、現代美術館はアクセスが悪いというマイナス面があったが、今は「めいぷる一ふ」が30分置きに行っており、それに対して、現代美術館として何を来館者に与えるかというポイントも要るのではないか。

(津村委員) 広島市の平和推進の基本的な考え方は、平和への思いを共有するまちづくりの実現

を目指して、そのために被爆の実相を守り、広め、伝えるということを基本において取り組んでいる。その中で被爆建物等の建造物の保存、継承に力を入れている。被爆建物等は、被爆の惨禍と、そこにいた人の営みを一瞬に奪い去ったということを直接人に伝える貴重な財産という認識であり、保存・継承を積極的に行っていこうと考えている。ピースツーリズム推進事業は、被爆建物等をルート設定して回っていただくということがメインになると期待しており、平和推進の方向性とまさに合致した事業だと思っており、国際平和推進部としても経済観光局とタッグを組んで連携し、成功に向け汗をかいていきたい。

個別の事業の話になるが、今年度の新規事業として、被爆建物、被爆樹木等の散策ガイドを制作・印刷することとしており、ピースツーリズムのルート設定、平和関連施設の紹介とかぶってくるが出てくる。今年度いっぱいかけて制作するが、双方がちぐはぐなものとならないよう、整合を図りながら、二人三脚でやっていきたい。

もう一点、建物を見るだけになるのではなく、被爆までどういう人達がどういう営みをしていて、8月6日に何が起こったか、どうなったかをイメージしていただけるコンテンツの作り方、説明の仕方が要る。建物の保存・継承は何のためにするかというと、何が起こったのかに思いをはせていただき、原爆の惨禍を知っていただき、平和への思いを共有していただくためであり、コンテンツの作り方は非常に大事だと思う。その点でも、知恵を出し合っていきたい。

(原田座長) 国際平和推進部は言うまでもなく平和行政の要を担当されており、こういう議論が出れば出るほど相当負荷がかかってくると思うが、ぜひしっかり受け止めていただきたい。新しい事業を始め、資料も整えていくことになる。両者がタイアップしていただきたい。ここで出てくる議論は、他の部局にも当然関わってくる。都市整備局では広大旧理学部校舎の保存をどうするかという議論をしている。また、県の所管になるが被服支廠の建物をどういう形で残していくかという問題も結論が出ていない。70年経っていまだに結論が出ていないというのは、外から見ると不思議な世界ではないかと思う。東日本大震災の関係で、昨年も東北大学の教授達が被服支廠を見て、こんなすごい建物が被爆した状態のままで今まで残っているというのは驚きだ、どうして放置しているのか、なぜ何か次の活用策を考えていないのか、という発言があった。県の仕事にはなるが、しっかり考えていかないといけない。道路交通局では、公園や道路の維持などの管理をしており、道路関係についてどう旅行者に伝えることができるか。例えば供木運動について、廃墟の中で立ち上がり100メートル道路を作りあげた先人達の努力、そして国内外からの供木により今日の道路や樹木があるのであり、それらについても関係部局と連携して進めていく必要がある。

②外国人旅行者に巡ってもらい、広島を思いを共有していただける平和関連施設等の提案

(前田委員) 広島を訪れる外国人観光客は、ここ広島に来ることにまず意味がある。彼らは平和や原爆に関心を持って来ており、広島という空間を感じるために来ている。どういうところを巡ってもらうかということについては、様々な人が様々な思いを抱くものであり、平和記念資料館だけでもう終わりたいという人や平和でおだやかな日常に帰りたいという人もいるだろうから、色んな観点から来広者のニーズに対応できるような情報提供のやり方を考えておくことよいか。例えば平和記念公園の中にある慈仙寺の墓石のように過去のことをそのまま残しているところがあり、歴史的な観点で見たい人にはこういう所があるとまとめるなど。

トリップアドバイザーのランキングを見てみたが、色んな場所が上位にランクしているが、平和に関連していないものは無い。自然、博物館、記念碑、アクティビティなど、ルート設定に取り組む視点の話になるが、自由に色んな選択ができるようにしてあげればよいのではないかな。

もうひとつ。広島には原爆に関心を持って人々が来られるのだが、原爆で一瞬のうちに失われたが今のように再生しているということにも大きな意味があると感じている。外国から来られた方が、広島は復興を遂げ今はこのようになったんだ、自分達にもできるということをよくおっしゃる。

(水本委員) 私のイメージでは、ボストンのフリーダムトレイルのような一本の道ではなく、歴史をたどるトレイルなど、複数のトレイルがあり、それが色分けされているというイメージが浮かぶ。さらに、似島、呉、竹原など広島市内以外のコースも、オプションとして示すこともできる。私は市立大学で平和インターンシップという広島の色んな所をフィールドワークとして歩いて専門家から話を聞く授業をしている。現代美術館では、芸術で表現されている核やヒロシマについて学芸員から詳しく話を聞く。また元陸軍糧秣支廠の建物を利用している郷土資料館では、旧陸軍の話や明治初期の宇品港の開発、明治天皇が広島に行幸したときに「みゆき通り」が出来、日清戦争の戦勝記念の凱旋門や碑が立っていたなどの歴史を学芸員から聞く。広島城は学びの宝庫であり、旧大本営跡や陸軍第五師団司令部があった戦前のこと、原爆投下第一報を発した中国軍管区司令部跡や被爆樹木を含む被爆時のことなどを学芸員から聞く。水の話は、日清戦争後に全国で始めて、旧陸軍の予算で牛田に上水道施設が造られた事を伝える水道資料館で話を聞く。江波山気象館にも学芸員がおり、被爆の痕跡がある。色んな所に専門家がいたので、彼らにピースツーリズムの語り部になっていただくのは大変かもしれないが、彼らとリンクして活用しながら、彼らのノウハウをどう英語で伝えるか。まずはこうした歴史を伝える場所と、そこで話しを聞く事のできる専門家の情報を洗い出しをしてどう整理するかという作業が要る。

(渡部委員) 「グリーン・レガシー・ヒロシマ」という名前で、7年くらい前からユニタールと一緒に被爆樹木の存在とその価値を伝える活動を行っており、今年やっと被爆樹木のカルテができた。被爆樹木の中には、かなり変形したもの、傾いたものも多数あるが、その、生きて広島を伝え続けている姿を見るたびに感動する。私は木を“見に”行くのではなく木に“会いに”行ってくださいと言っている。人間については被爆の調査・研究が行われてきたが、他の生き物、特に木に関しては、長い間ほとんど調査がなかった。4、5年くらい前から、筑波大学を中心に、被爆樹木に関する調査が始まり、今では驚くような結果が出てきている。調査を踏まえてもう一度被爆樹木を見ると、また違った観点でその素晴らしさを体感でき、大きなエネルギーを与えられる。この広島の宝を保全しつつ、どう皆様に出会っていただくか。広島の子ども達にも知ってほしい。広島城に素晴らしい木があるが、神社の前の売店の方はご存じない。被爆樹木には存在の意味と深い価値があるが、それは被爆を証言するものとしてだけでなく、もっと広く大きな哲学を共有できるものとしてではないか。

「はぐくみの里」という障がい者施設の皆さんが、平和記念公園に寄せられた折鶴を1枚ずつ開いて、選別する作業をしている。文字が書かれた折り鶴は、再生紙商品としての再生利用ができないため、仕分け作業が必要なのだ。その作業の中で、折り鶴に書かれたメッセージを読んだことが発端となり、「はぐくみの里」の中にピースクラブが誕生した。障がい者の皆さ

んが、自分達で平和を発信したり、歌を歌ったりするクラブだ。例えばこうした施設を訪れていただくことも、広島の本質的な深い意義を伝えることになると思うし、皆さんにも喜んでいただけるのではないだろうか。このような場も平和関連施設と言えるとと思う。

最後に一つ、紛争地や被災地からの皆さんをお迎えする時に、何かできることはないか…ということで実施しているのが、被爆されたおばあちゃん達にお願いして、ご飯、つまり、普通の食事を作ってもらい、それを食べてもらうということである。手作りの食事には、思い出、感謝、パワー、笑顔、文化が宿る。ゲストの皆様にも、本当に喜んでいただき、力をもらったと言っていただけ。これも大切なおもてなしの一つで、広島を伝えることになると思う。

(平尾委員) 阪谷委員が言われた、ピースツーリズムが、広島を学ぶということはもちろんだが、来た人達が未来へのエネルギーを得られる場であってほしいというのは、いわゆるツーリズムとは違う、広島のピースツーリズムにかけたい思いの一つだと感じた。巡って大変だったねというだけでなく、紛争地から来た人も含めて来た人達がどう勇気づけられて、自分に何ができるか考えられる第一歩、踏み込める第一歩を得られたらいいなと思う。そこで、平和関連施設を巡るだけでなく、やはり大事なのは人に会うことではないか。広島の人かもしれないし、世界の人かもしれないが、ここで得たことを一緒に考えながら、自分達は何ができるかなど得たことを人と共有する。ルートを引く、施設を整備する、ARを整備することも大事だが、どう人と人が関わるかということもコンテンツの一つとして織り込めないか。そこにこそ、新しい可能性が生まれる部分だと思う。施設等の提案の中に、“場所”はなく“場”も一緒に考えたい。

(古谷委員) ひろしま国際センターやJICAから、広島が凄まじい惨禍を受けながら、見事に立ち直った過程を語れるようになってほしいという依頼を受け、発展途上国から来られるたくさんの技術者などの方々のために1時間程度パワーポイントを使って話すということをしている。浜井市長のことや、海外からの支援をどのようにいただいたかということをしきりと整理してプログラムを作っている。歩くこともよいが、映像で過程を見ていただくということもできるのではないか。

(辻委員) 以前の平和記念資料館内の展示を見てやはり気持ちが重くなったことがあるが、平和記念資料館を出た後、平和記念公園が広くて心が救われてほっとする、空が広くて平和であるということを感じて心が安らいだ。勿論被爆建物を見ていただくが、ずっと被爆、歴史ではなく、未来に向け広島がこれだけ回復し発展しているというような、心が安らぐところも平和と称して組み合わせてあげればと思う。

(津村委員) 来られる方は色んなニーズを持っておられ、水本委員の言われたように、一本の線というよりは、何パターン、もしくは何エリアかあって、一つのエリアの中で平和も感じていただけるし、観光もできるし、休憩、食事もできるというようなもの。高齢の方はなかなか移動も難しいというご意見もあるので、線で結ぶというよりは、いくつかのエリアがありエリアとエリアの間を線で結ぶというイメージでやってはどうか。広島城を一つの拠点とすると、縮景園や、通信病院にも被爆建物の旧外来棟、資料室があり、このあたりを徒歩圏内で一つのエリアを考える。あと、比治山から広島駅のエリア。比治山は、現代美術館は市の職員としてもっと利用促進を図りたいものであり、被爆建物としては頼山陽文徳殿があり、近くに川もある。駅とうまく結べられれば、復活をさせた猿猴橋やそのたもとの水上タクシーも発着する川の駅

など、平和と観光、休息・飲食などをうまくゾーニングしてはどうか。

(阪谷委員) 究極の目標は平和への思いを共有していただくことである。今日色々ご意見いただいたものをうまく整理して展開していきたい。平尾委員から話のあった、“場所”だけでなく“場”というのもよいと思う。場所や個々人の活動もある。最初は点だが、点を結んで線にする、そして面にするという作業について、この点とこの点を結べば線になる、こういう線と線を結べば面になるということと一緒に考えていくことができればと思う。ぜひ、この木には強い思い入れがあるのでぜひこの木に会ってほしい、この活動はこんなことをしているのでぜひ使ってほしい、この場所はぜひ訪れてこういう思いを感じてほしいなど、一つ一つの場所、施設、人、活動を挙げていただき、それを事務局と一緒に整理することができれば、すごくよいピースツーリズムになるという感じがしている。

(原田座長) 辻委員が言われたように、市民意識の問題や、広島に来られる外国人旅行者の思いも調査する必要がある。それも含めて、事務局で次につなげていただきたい。今追加でお配りしているのは、3月23日付けの新聞に掲載された、広島への修学旅行の感想についての愛子様様の作文である。以前広島にお迎えした天皇皇后両陛下、皇太子御夫妻、そして愛子様様の思いがそこに結集されている。これほどの思いを持って広島に対する感想をお書きいただいた。これはまぎれもなく天皇皇后両陛下、皇太子御夫妻、そしてご本人の強い意志によって書かれたものだと思う。これを受け止めるということは、まさに広島の平和行政について問われていることではないか。残念ながら日本政府はそこに向いていない。市長がニューヨークに行かれているが、核兵器禁止条約がどこようになるか、せめぎあいの中に今日がある。皇族の愛子様からこのような発言がなされたということは、行政としてしっかり受け止めてしかるべきだと考えている。

ボストンの話があったが、広島の姉妹都市であるドイツ・ハノーバーにも同じようなものがある。赤い線が市役所の前から張り巡らされており、まさにボストンと同じような形態のもので、これも一つの方法であるかと思う。しかし、描き方をうまくしないと景観を阻害してしまう心配もある。今の時代であれば、コースを組み立てられるような素敵な表示もできるのだろうが。

(渡部委員) 広島の企業の皆様にも協力していただきたい。先日、留学生支援センターの広島を知る取組で、アンデルセンでのランチというものがあった。廃墟の中で車を引いて高木さんがパンを売ったところからアンデルセンの歴史があり、今日も哲学を持って経営している。それはすごいことだと思う。留学生達の中には、経済を専攻している学生がたくさんいた。この人達にこの精神を受け継いでもらうのはよいことだと思う。広電や広銀もある。それら企業のご協力も得られるとよい。

(原田座長) よく修学旅行の受入をするが、他県等から修学旅行や平和学習に来た人達の話の聞くと、むしろ広島市内の小・中学生の取組が充分でない、何かなおざりなことしかできていないという印象を受ける。教育委員会も一生懸命やってきているのだろうが、地元であるがゆえに発信も受信も弱いのではないか。行政の内部で、もう一回考え直す必要がある。それも、広島の受け入れる側のおもてなしにつながるのではないか。

袋町小学校の被爆建物は、あのような形で残すのでよいのか当時大変な議論がありながら今の形になり、まちづくり交流プラザは使い勝手の悪いものになった。しかし、残すことによっ

て、平和学習の大きな場所になっている。そこに案内した時に聞くのは、あの瞬間に“人”がどうなったのかということがほとんど書かれていない、建物の物的な影響について展示はあるが、どれだけの人がどのような状態で亡くなったのかという展示はほとんど無く残念だということである。それぞれの立場で自分達がどう生き延びてきたのかということが書いていない。そのような視点で見る人もたくさんいる。広島発信方法を考え直す必要がある。

③その他意見交換

(前田委員) ここにいるのは多分知的レベルの高い人達であり、接触する相手もそういう人達が多いのではないかと。 “知的レベルの・・・” という話をしたのは、平場の人達を大事にすることも必要ではないかと思ったからである。普通に広島に観光に来て、そうだったのかと、何かを感じてもらうことが必要であり、そのような発想も含めて議論したい。

人とのつながり、人が大事だという話があった。確かにそれは必要だが広島でそういう人達を育成し得るのか、そういう人達がいるのかということも、もっと考える必要があるのではないかと。 地方に旅をした際に経験することだが、「このようなどころがあるから行ってみなさい」と、街角で出会った人が良い情報を教えてくれたりする。広島はある程度の都会でせわしく人のつながりも薄いから、そこまではないかもしれない。 そうなるときつと「では、ボランティアの方々に色々な役割をお願いしよう」となってくるのではないかと思うがそれが可能かどうかという問題もある。

(水本委員) 広島に住んでいる人も意外と気付いていないところを気付かせる切り口があってよいと思う。例えば、広島の緑地には、平和記念公園周辺の緑地、平和大通の緑地、河岸緑地の3つのポイントがあり、これは広島の復興の最大の特徴の一つとされている。特に6つの川のリバーサイドは、水を求めて川に入って死んだ大勢の被爆者を悼む意図を持って緑地にされた特徴あるものなのに、その情報が市民に共有されておらず、案内する人もあまり強調しない。こうした情報を、もっと共有してよいと思う。

また、私は時々、広島の教育を学ぶ学生や教育関係者を対象とした講義で、原爆投下の標的となった相生橋の被爆後の写真を見せ、もっとも橋に近いところにある建物を指してこれは何かと聞くが、答えられない人が意外に多い本川小学校である。広島は軍事目標だから原爆が投下されたと信じている米国人が多いが、その最も近い建物で大勢の子どもたちが被爆死したエピソードをきちんと伝えることで、原爆が非戦闘員を無差別に大量に殺す兵器である事を、外国人にも理解してもらえる。広島を訪れる教育関係者には、本川小学校や袋町小学校の資料館や、基町高校の創造表現コースが描いた被爆者の絵など、教育の視点を提示するのもよい。

平和大橋、西平和大橋をデザインした日系米国人の芸術家イサム・ノグチは原爆慰霊碑の原案も作ったが、建築委員会から「ノグチはアメリカ人だ」との理由でその案は拒絶された。彼は、日本人として日本の起こした戦争に罪悪感を抱き、米国人として米国の行った原爆投下に罪悪感を持ち、日米の架け橋になりたいと心をくだいて原爆慰霊碑のデザインをした。平和大橋と西平和大橋は採用されたが、委員長の岸田日出刀が慰霊碑だけは「原爆を投下したアメリカ人にさせるな」と拒絶した。大学の授業でイサム・ノグチについてのビデオを見せるが、彼が幻の慰霊碑をデザインしていたことを多くの学生は知らない。「高校時代に古ぼけた橋（平和大橋や西平和大橋）をいつも通って学校に行っていたが、これがそういう人のデザインだと

は知りませんでした」と言う学生も多い。ノグチのデザインした幻の原爆慰霊碑は、実現していれば素晴らしいデザインであり、その模型は現代美術館にも収蔵されている。このようなエピソードを改めて足元から発掘し、ストーリー性を持って提示することが大事だと思う。

(渡部委員) ついこの間、NHKのEテレで「原爆スラム」と呼ばれた街で」というドキュメンタリーがあった。ディレクターが一生懸命基町の中に入って、足で歩いて作り上げた作品だった。冒頭、河岸でバーベキューをしている市民が、ここにスラムがあったということに「えっ、そうなんですか」と言うシーンから始まった。これが今の現実ではないか。これをしっかりおさえてピースツーリズムというものを考えていかないといけない。また、昨日あるメディアの方から、若い記者が広島のことを知らない、何のことやら分からないままに取材をしているという話があり、皆で一緒に勉強しないといけないという話をした。これも大切なポイントかと思う。

(平尾委員) ツーリズムと言いながらも、市役所の中でも色々な部署が関わってくる話になり得るという話があった。平和教育について、8月6日の登校日が議論になっている。平和教育の副教材をつくる委員会にも1回参加した。言葉はきついが、平和教育が今形骸化しつつある中で、このツーリズムが人材育成につながる要素を持たせられないか。例えば、長崎さるくのような形で市民が街を案内する一つとして、市民がこのツーリズムの立役者になることが実は平和教育にもつながっているような仕掛けができないかと強く感じた。

(古谷委員) 平和記念資料館本館が今リニューアル工事中で、東館が4月26日にオープンしたが、とても案内しにくい。エスカレーターで3階に上がって、ホワイトパノラマは被爆前の広島、原爆投下の状況、被爆直後の惨状を1分半で伝えていてよいのだが、その後の展示が大きなグループを案内するのにとてもやりにくい。それで1階の禎子さんの折鶴や伸ちゃんさんの三輪車から始める。平和記念資料館に来た要人達の言葉は、今はあまり展示されていないのだが、本館が閉じる前は全部ファイルにしてあって、この方がいつどういふことを言ったかということがファイルをめくらないと読めない。できれば、教皇様の言葉や、前アメリカ大統領のメッセージ等を、映像で見えるようにしてほしい。ファイルをめくって見るというのは、多くの人達を案内する時は難しい。

(辻委員) 外国からのお客様がたくさん来ていて、広島市の国際的な重要性は拡大している。平和の議題からそれるかもしれないが、外国人に優しい街として、ムスリム対応のトルコ料理店や、また先日広島県とメキシコのグアナフアト州の友好提携3周年式の際、調べてみるとメキシコ料理の店もあり、韓国料理もあるというような、国際的な都市・広島というのも織り込んでいただければと思う。

(津村委員) ユニタールさんとお付き合いをさせていただいた中で、アフガニスタンから来られた政府の中堅職員の方々から、「広島は廃墟だと思っていたら、こんなにきれいな街になっている。それが我々にとって希望なんだ。」といった言葉があったのを思い出した。被爆の実相を伝えるということももちろん大事でやっていかないといけないが、今の平和できれいな広島を見てください、平和の思いと希望の思いを共有していくという視点も大事ではないかと思った。平和記念資料館については、どのような改善ができるか部内で検討していきたい。

(阪谷委員) いただいたご意見を次回に向けてきちんと整理していきたい。

(原田座長) 平和記念資料館東館の展示の問題の話があった。本館については、展示の中身を議

論し具体的な展示を今から作り上げるが、平和記念資料館をご覧になって、こうあるべきだということについて、この懇談会の中で提案があってもよいのではと思う。

私は旅が趣味で、鉄道を使いながらあちこちに行くが、何をしにいくかといえば、そこにしかないもの、そこでしか体験できないもの、そこでしか見ることができないものを訪ねるのが一番の目的である。広島には、広島にしかないものはたくさんあるが、夜の広島の観光に結び付けられるものがあればよい。神楽は始まったが、神楽しかない。ソウルにはコリアハウスというものがあり、韓国の伝統芸能が全部コンパクトにまとめられている。広島で他に何があるかと言われると立ち止まらざるを得ないが。広島での夜の過ごし方というのも加えることができれば、より多くの方に受け入れられるのではないか。

今日は、色々ご意見をいただいたが、今後のヒアリングなどの調査について、事務局で意見があれば発言していただきたい。

(JTB) 貴重なご意見をいただいた。中でも、これまでの過去を継承するような話から、未来への志向という視点、文学というご意見もあり、平和コンテンツの拡充、広島という都市が持つ社会の資産をもう少し掘り起こす必要があるのではないか。広島県において国際平和拠点ひろしま構想があり、また県内にユニタールやJICAという組織があるので、そういった平和関係の活動に取り組む組織に対してのヒアリング調査も大事になると考えている。また、高齢者の観光、景観、交通、移動などの問題についての意見もあったので、そういった観点から専門家の意見を聴き、ユニバーサルデザインに配慮したルート設定のあり方を検討するためのヒアリング調査等を実施していきたい。最後に、地域の活性化が重要になると思うので、まちづくりという視点を考えると、地域の市民が関わるという点と、商業事業者の方々が関わるという点が、非常に大事になるだろう。また、夜の観光という視点もあったので、宿泊の観点も重要。経済的な効果を検証していくということで、交通事業者、宿泊事業者、商工団体の方々に対してもインタビュー調査をしていきたい。私どもの会社も旅行業を主としているので、旅行として事業化を推進していくためにどのように視点が大事になってくるか、弊社の関係セクションに対してもヒアリング調査を行い、インバウンド推進だけでなく教育旅行としての事業化の可能性も含めて調査検討をしていきたい。

(原田座長) 旅行業界の方々からも質問があると思うが、シーズンに入ると、広島での受け皿、ボランティアガイドや平和記念資料館のピースボランティアといった方々の確保が難しい。学校側から聞くと、あちこちの複数の団体にガイドの申し込みをして、結果的に必要な人数のガイドが集まると、それを越えて集めていただいた団体については直前になってキャンセルするそう。旅行業の皆様からも、異論があるのではないか。窓口を一本化することが、温かく迎えることにつながるのではないか。そのためには、市民一人一人が意識改革をすることが必要である。温かくおもてなしをするような意思をもった人には、例えば、簡易なものでよいのでバッジを作り、何かあればこのバッジをつけた人に声をかけてくださいというのもよいのではないか。市民の方から意思表示することによって、国内外から来る人にとっても受け入れやすくなるのではないか。広島駅でも赤いジャンパーを着て構内を忙しく活動をされているのをよく見かける。すごく心に残る。そういう1つ1つのネットワークをつなげればより効果的になる。

(渡部委員) 事務局が今日の議論をきれいにまとめてくださったが、「未来志向」という言葉は、

こと広島に関して、慎重に使うべきだと思う。人の営みはつながっていて、過去があって今日がある。広島の過去を水に流すことはできない。あまり簡単に「未来志向」と言わないで、あくまでも過去をベースに、現在を見つめ、未来に向かって取り組んでいく、その過程が大事ではないか。

(原田座長) まさに去年オバマ大統領が来られたときに、心に痛みを覚えたのは、「広島に大統領がやってくるということは、ただ単に過去を振り返るだけではなく、未来へのメッセージを発信することだ」と言った。私は、悲惨な過去をしっかりと刻むことによってこそ未来があるのだと思うので、ホワイトハウスのあの発言にはわだかまりを覚えざるを得ない。

今日は皆様から意見をいただき、次につなげることができる状況になったことに感謝したい。

(事務局) 今後、本日の意見を整理し、またヒアリング等の調査を進め、次回お示しできる範囲でお示ししたい。次回の懇談会は資料にあるとおり7月24日の週の午後で今のところ考えており、後日事務局から日程調整のご連絡をさせていただく。